



ラグジュアリーな羅針盤

COMPASS OF LUXURY

世界観を編む叡智 人文学がローカルな工芸を救う

ならないのか」という必然性を感じ取れるかどうか。そこに、単なる技巧を超えた物語の深みが生まれます。機械式時計を例に挙げた氏は、印象的でした。

スマートウォッチより機能的には劣っても、複雑な機構の美や歴史の香りが持ち主の価値観に響き、「これを持つ自分が好きだ」と感じさせる。技の背後にある世界観が、顧客の幸福感やアイデンティティを支え、「生きる意味」さえ提供しているのです。これは工芸品にも通底する本質であり、世界観は自己像を満たす媒体として機能します。

この指摘は、私自身が現場取材を通じて痛感してきた課題でもあります。日本の伝統工芸が誇る技術水準は確かですが、世界の市場では「なぜこれなのか」と問う顧客に答えられる物語の力が必要です。素材や技術の選択に宿る意味、空間や体験を通じて顧客の自己像を支える必然性、そうした要素こそが、工芸を単なるモノから「なくてはならないもの」へと引き上げるのです。

このような文脈をまとう工芸は、単なる装飾品ではなく「いま生きている美」として響きます。だからこそ、私たちの課題は、工房支援にとどまらず、職人の技を新たな世界観のなかにどう位置づけるかを考えること。これは工芸振興にとどまらず、日本の美意識を再編し、世界に発信し直す営みそのものでもあります。

立川氏は「伝統工芸は成長産業である」と語りました。世界に類を見ない技術体系だからこそ挑戦すべきだと。私もまた、その挑戦を支える羅針盤は世界観の設計にあると確信します。技の背後にある思想や物語

を翻訳し、現代の感性に響く意味を含ませ再編集する「語り手」としての責務が、私たちに課せられていると受け止めました。

この営みは、人文学の復権とも響き合います。技術や歴史の断片を並べるだけでは真の価値は伝わりません。職人の技や製品を使うシーンを「現代を生きる人間の営みの物語」として再構築し、顧客の感情に届ける知の力が必要です。グローバルな波に埋もれかけた人文学は、いまやローカルな工芸の叡智を通じて、世界観を編み直す実践の現場で、その再生の可能性を示しているのです。

PALACE HOTEL TOKYO / 神殿
DESIGN : DESIGN POST (神殿)
齋藤上太郎 (組子)
PHOTO : Nakasa & Partners



THE PENINSULA TOKYO / PETER BAR
DESIGN : STUDIO SAWADA DESIGN



TOKYO SKYTREE / SUPER CRAFT TREE
DESIGN : 乃村工藝社
橋本夕紀夫デザインスタジオ



中野香織

富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆・教育・企業アドバイザーに携わる。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。ラグジュアリー文脈のなかで伝統文化を考える「雅羅会」アドバイザー。最新刊「『イノベーター』で読むアパレル全史増補改訂版」6月20日発売。

写真はすべて立川氏が伝統工芸を応用してディレクションした空間